

# 教職大学院生が主体となる授業検討会ってどんなもの？

-東学大「対話検」と大教大「模擬検」による交流会の事例報告-

作成者：八田幸恵、津田涼平

参加者：石井健登、伊藤敏志、大久保絢葵、栗真人、釋詩音、津田涼平、藤澤未優、松平蒼慧、松村拓海

## 授業者を批判するような授業検討会って、どうなんだろう？

指導案を書いて、模擬授業をした後、「あれはどうだった」とか「もっとこうしたほうが良いよ」と言われた経験ありませんか？  
もらったフィードバックにどこか納得できず、自分らしい授業って何かよくわからないまま終わってしまう。それじゃダメじゃろ！



「模擬検」からの参加者

## こうした問題意識に向き合ってきた2大学の模擬授業検討会

大阪教育大学教職大学院では、教育実践力コースの一部学生によって模擬授業検討会の方法を模索してきた（通称「**模擬検**」）。活動にあたって参照してきたのは、東京学芸大学教職大学院で実践されている「対話型模擬授業検討会（通称「**対話検**」）」であった。2年間の継続的な活動の成果が実り、**2026年1月23日（金）に東京学芸大学にて両検討会の交流会を実施することができた。**

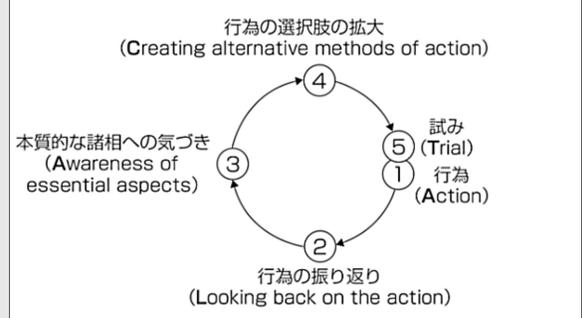
## F.コルトハーゲン（2010）の「ALACTモデル」がヒントになるかも？

最たる特徴は、第三局面「**本質的な諸相への気づき**」にある。一足飛びに解決策を考えるのではなく、なぜそうしたことが発生したのかを自覚したうえで、次の選択肢につなげていくことが重視される。授業研究では、「**8つの問い**」をもとに参加者が問いに答える過程で発生するズレを明らかにし、「本質的な諸相への気づき」に向かう議論を進めていくことが目指される。

文献：F.コルトハーゲン（2010）『教師教育』武田信子監訳、学文社。

	教師	学習者
Want	教師が何を望んでいたか	学習者が何を望んでいたか
Do	教師が何をを行ったか	学習者が何をを行ったか
Think	教師が何を考えていたか	学習者が何を考えていたか
Feel	教師が何を感じていたか	学習者が何を感じていたか

8つの問い



ALACTモデル

## 実際と、交流会から見てきた両検討会の工夫

### 「対話検」の様子

①加藤（中・社）「中3：主権者教育」



### 「模擬検」の様子

①釋（小・算）「小3：プログラム案を考えよう」



②松井（中・社）「中2：室町時代の産業の発達」



②津田（中・社）「中2：兵庫県の県庁所在地はなぜ神戸？」



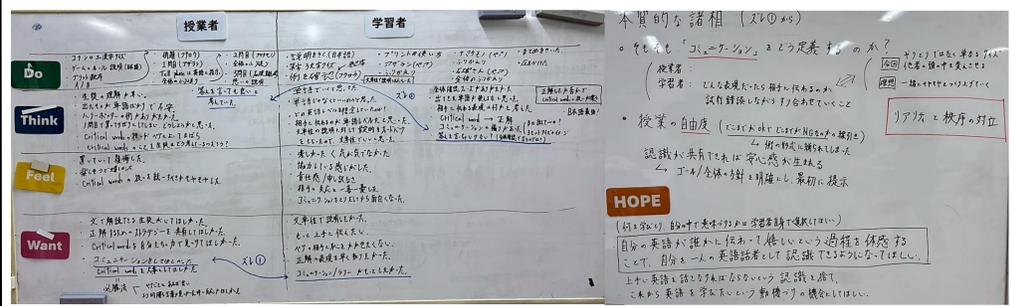
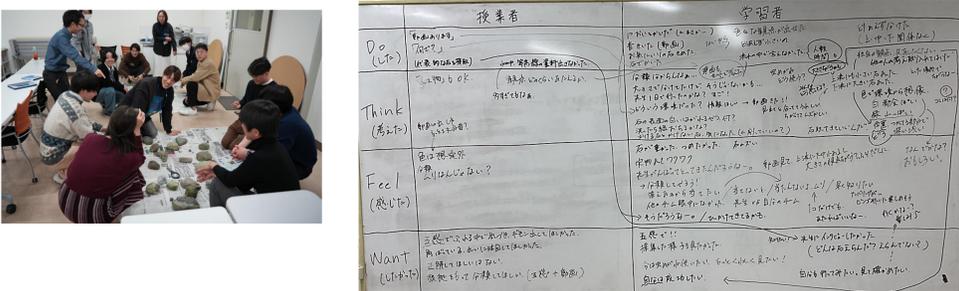
③楯（小・道）「小6：手品師」



③松平（高・英）「高：Explain in English」

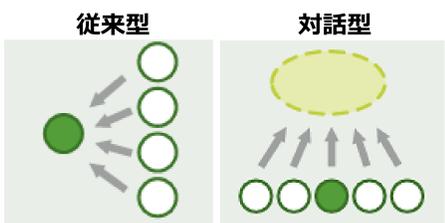


④進藤（小・理）「小5：石がどこから来たのか考えよう」



### 「対話検」の工夫

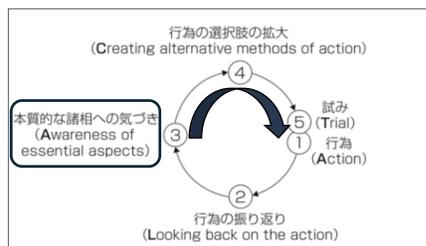
参加者全員が安心して参加できるように



授業者に話すのではなく（左）、目的に向かってみんなで話しあう（右）

### 「模擬検」の工夫

授業実践者が納得できるように



「本質的な諸相への気づき」を、授業実践者が次の実践への指針につなげるための教訓として位置づけてきた

授業者の願い（HOPE）を開示するタイミングをつくり、参加者はその思いに寄り添いながら次への選択を共に考える

## 教職大学院生が主体となり実施される両検討会で大切にされたことは

「**場づくり**」や「**ふるまい方**」が重視されている。

いかなる検討会であれば授業者が安心して内心を打ち明けられるか。

いかなる模擬授業を準備すれば充実した学びを、さらには充実した検討会を実現しうるか。こうした問題意識を共有しつつ両会は実施されてきた。

